

ターミネーター（映画）

出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

『**ターミネーター**』（原題：*The Terminator*）は、1984年のアメリカ映画。ターミネーターシリーズの第一作である。

目次

概要

あらすじ

キャスト

スタッフ

日本語吹替

地上波テレビ放送履歴

作品解説

人選

裁判

エンディング

その他

ソフト化

VHS

DVD

Blu-ray disc

続編

ゲーム作品

関連書

脚注

関連項目

外部リンク

概要

オリオン・ピクチャーズ/ワーナー・ブラザース配給。一般的にはB級映画と評されるであろう低予算での製作だったが、本作のヒットを受け1991年に製作された続編『ターミネーター2』では1億ドル以上を費やす程の製作費が組まれた。その後も2003年に『ターミネーター3』、2009年に『ターミネーター4』が製作される。また、直接的な繋がりはないものの、2015年に本作のリブートとなる『ターミネーター:新起動/ジェニシス』が製作された。さらに、2019年には新作『ターミネーター:ニュー・フェイト』が公開された。

あらすじ

近未来において、人類と機械軍の熾烈な戦いが行われている中、その最後の戦いは、過去であるはずの今夜に始まろうとしていた。

ある裏路地にまばゆい電光とともに筋骨逞しい男性が現れ、服や銃を強奪し、「サラ・コナー」という名前と「ロサンゼルス」という住所だけを頼りに、電話帳に載っている同姓同名の女性を順番に殺していく。一方、遅れて現れた別の若い男性も、今ここが1984年5月12日木曜日のロサンゼルスであることを確認すると、悪夢にうなされつつ誰かを探し始める。

最後のサラ・コナー宅に侵入した逞しい男性は、サラと同居する友人ジンジャーとそのボーイフレンドのマットを殺害し、外出中のサラの顔と声の情報を入手。ついに彼女が町のディスコにいることを突き止め、現地へ乗り込み殺害を実行しようと銃口を向けるが、やはりサラを追っていた若い男が間一髪で阻止する。一緒に逃げるよう促され、事態が飲み込めず怯えるサラに、男はリース軍曹と名乗り、「襲撃者はロボットであり、サラを殺害するために

	ターミネーター
	<i>The Terminator</i>
監督	ジェームズ・キャメロン
脚本	ジェームズ・キャメロン <p>ゲイル・アン・ハード</p>
製作	ゲイル・アン・ハード
製作総指揮	ジョン・デイリー <p>デレク・ギブソン</p>
出演者	アーノルド・シュワルツェネッガー <p>マイケル・ビーン</p> <p>リンダ・ハミルトン</p>
音楽	ブラッド・フィーデル
撮影	アダム・グリーンバーグ
編集	マーク・ゴールドブラット
配給	 オリオン・ピクチャーズ <p> ワーナー・ブラザース</p>
公開	 1984年10月26日 <p> 1985年5月25日</p>
上映時間	108分
製作国	 アメリカ合衆国
言語	英語
製作費	\$6,400,000 ^{[1]}
興行収入	\$38,371,200 ^{[1]} <p>\$78,371,200^{[1]} </p>
配給収入	5億3,000万円 ^{[2]}
次作	ターミネーター2

未来から送り込まれ、彼女が死ぬまで狙い続けること」「カイルはまだ見ぬサラの息子(ジョン・コナー)の指示により、彼女を守るために現代へやってきたこと」を告げ、状況を説明する。

2029年の近未来、核戦争後の世界で反乱を起こした人工知能「スカイネット」が指揮する機械軍により、人類は絶滅の危機を迎えていた。しかし抵抗軍指導者であるジョン・コナーの指揮下、反撃に転じ、人間側の勝利は目前に迫っていた。脅威を感じたスカイネットは、逞しい男性の姿をした殺人アンドロイド「ターミネーター・サイバーダインシステム・モデル101」を未来から現代へと送り込み、ジョンの母親となるサラ・コナーを殺害することでジョンを歴史から抹消しようと目論む。同じ頃、抵抗軍からも軍曹カイル・リースが、サラの護衛という使命を帯びて未来から送り込まれた。ターミネーターとカイルは未来に戻ることができず、抵抗軍が時間転送機を破壊したため、「二人」に続いて1984年へ来る者はいない。そしてサラは、ジョンを育てた偉大な母として伝説になっていたが、父親については細部不明で核戦争前に死亡しているという。

パトカーを強奪したターミネーターに追われ、カーチェイスの末にターミネーターは損傷、サラとカイルは警察に捕まる。カイルは尋問を受けるが、誰も彼の話を信じないことに絶望する。一方、サラは警察から防弾チョッキを与えられ、その夜は警察署内で保護されることになった。しかしターミネーターは警察署を正面から襲撃し、サラは再び間一髪のところではカイルに救われる。逃避行の中で、サラはカイルの話を信じ、心を開いていく。また、カイルもジョンにサラの写真を見せられて以来、思慕していたことを打ち明け、互いへの愛を抱いた2人は、潜伏先のモーテルで結ばれた。

休息も束の間、宿泊したモーテルの場所を突き止められて、更なる追撃を受けるサラ達。ターミネーターの運転する大型タンクローリーに対し、満足な武器もなく手製の爆薬での応戦を余儀なくされ、銃弾を受けて傷付くカイルだったが、サラの手助けと励ましもあり、どうにか窮地を脱し、タンクローリーの隙間に爆薬を押し込んで爆破させ、ターミネーターを炎上させる事に成功する。しかし、燃えたのは表面の生体組織と服だけだった。ターミネーターは炎上する車の残骸から、超合金製の骨格を露わにした姿で立ち上がり、さらに追いかけてくる。

サラと共に近くの工場へ逃げ込んだカイルは、再びターミネーターと交戦するが、堅牢なボディを持つターミネーターに全く歯が立たず、ターミネーターの攻撃に瀕死の重傷を負ってしまう。カイルは最後の爆薬を使ってターミネーターの爆破に成功したものの、自らも爆発に巻き込まれて命を落とし、サラも片足に重傷を負う。カイルの死を嘆くサラに、上半身だけとなってもお迫るターミネーター。サラはターミネーターをプレス機に誘導して押し潰し、ついに右腕を残して完全に破壊する。

数か月後の11月10日、カイルとの子ジョンを宿したサラは、やがて訪れる「審判の日」へ向けての戦いを決意し、メキシコへ旅立つ。サラは息子のために音声で記録を残し、父親カイルのことも語っていた。そしてガソリンスタンドで少年から買ったポラロイド写真は、カイルが持っていた写真のものと全く同じだった。

キャスト

「ターミネーターの登場人物」も参照

ターミネーター(T-800) - アーノルド・シュワルツェネッガー

2029年時、スカイネットの脅威と成り得た人類抵抗軍を指揮するジョン・コナーの存在を事前に抹消するべく1984年にタイムスリップし、ジョンの出生母体となるロサンゼルス在住でサラ・コナーという姓名を持つ女性を全て抹殺、出生を未然に阻止するようプログラムされたヒト型潜入掃討アンドロイド。戦闘用に作られただけに、武器や兵器の扱いに長けており、戦略眼も優れている。

カイル・リース - マイケル・ピーン

2029年の人類抵抗軍のジョンの部下。戦闘能力が高い屈強な兵士でもある。ターミネーターから、ジョンの母となるサラを守るため、1984年にタイムスリップする。ロサンゼルス転送時の階級は技術情報部隊軍曹・DN38416。敬愛する上官ジョン・コナーの命により、写真を見たことで以前から想いを馳せていたサラの護衛としての任に就く。

サラ・コナー - リンダ・ハミルトン

後の人類抵抗軍のリーダーとなるジョンの実母。未来から来たターミネーターに狙われるが、カイルに助けられる。大学に通っており、レストランのウェイトレスとしてアルバイトしているが、遅刻癖があるなど、仕事熱心ではない。

エド・トラクスラー - ボール・ウィンフィールド

ウェストハイランド警察署の警部。「サラ・コナー連続射殺事件」にて、最後に残ったサラ・J・コナーの身柄を署で保護。同署に押し入ったターミネーターにより重傷を負った。

ハル・ブコビッチ - ランス・ヘンリクセン

ウェストハイランド警察署の警部補。カイルの話を真に受けなかったが、直後に署がT-800の襲撃を受け、自動小銃で応戦するが、反撃を受け、死亡したと思われる。

ピーター・シルバーマン - アール・ボーエン

犯罪心理学者。逮捕されたカイルを尋問し話を聞くが、真偽については信用しない。尋問を終えて警察署を去る際にターミネーターとすれ違いが、ポケットベルの着信に目を向けていたため、彼を直接見ることはなかった。

スタッフ

- 監督 - ジェームズ・キャメロン
- 製作 - ゲイル・アン・ハード
- 製作総指揮 - ジョン・デイリー/デレク・ギブソン



アーノルド・シュワルツェネッガー、リンダ・ハミルトンとマイケル・ピーン。

- 脚本 - ジェームズ・キャメロン/ゲイル・アン・ハード
- 撮影 - アダム・グリーンバーグ
- 美術 - ジョージ・コステロ
- 編集 - マーク・ゴールドブラット
- 音楽 - ブラッド・フィーデル
- 特殊効果 - スタン・ウinston/Fantasy 2 Film Effects/パシフィック・データー・イメージズ
- 提供 - ヘムデイルフィルムコーポレーション/シネマ84/ユーロフィルムファンド/パシフィックウェスタン

日本語吹替

役名	俳優	日本語吹替			
		テレビ朝日版	旧VHS版	新VHS/DVD/BD版	テレビ東京版
ターミネーター (T-800)	<u>アーノルド・シュワルツェネッガー</u>	<u>大友龍三郎</u>		<u>玄田哲章</u>	
カイル・リース	<u>マイケル・ピーン</u>	<u>田中秀幸</u>	<u>池田秀一</u>	<u>宮本充</u>	<u>小山力也</u>
サラ・コナー	<u>リンダ・ハミルトン</u>	<u>戸田恵子</u>	<u>高島雅羅</u>	<u>佐々木優子</u>	<u>松本梨香</u>
エド・トラクスラー ^[3]	<u>ポール・ウィンフィールド</u>	<u>福田豊土</u>	<u>富田耕生</u>	<u>宝亀克寿</u>	<u>内海賢二</u>
ハル・ブコビッチ	<u>ランス・ヘンリクセン</u>	<u>千田光男</u>		<u>仲野裕</u>	<u>内田直哉</u>
ピーター・シルバーマン	<u>アール・ボーエン</u>	<u>阪脩</u>	<u>塚田正昭</u>	<u>稲葉実</u>	<u>岩崎ひろし</u>
アラモ鉄砲店店主	<u>ディック・ミラー</u>	<u>徳丸完</u>			<u>塚田正昭</u>
掃除屋の男	<u>ノーマン・フリードマン</u>	<u>藤本譲</u>			<u>藤本譲</u>
ジンジャー・ヴェンチュラ	<u>ベス・モッタ</u>	<u>高島雅羅</u>	<u>叶木翔子</u>	<u>棚田恵美子</u>	<u>雨蘭咲木子</u>
マット・ブキャナン	<u>リック・ロソソヴィッチ</u>	<u>村山明</u>	<u>二又一成</u>	<u>堀川仁</u>	<u>檀臣幸</u>
バンクのリーダー	<u>ビル・バクストン</u>	<u>鈴置洋孝</u>	<u>中博史</u>	<u>坂口賢一</u>	<u>加瀬康之</u>
バンクA	<u>ブライアン・トンブソン</u>	<u>二又一成</u>	<u>桜井敏治</u>	<u>加勢田進</u>	<u>中博史</u>
バンクB	<u>ブラッド・リアーデン</u>	<u>千田光男</u>	<u>島田敏</u>		<u>土田大</u>
サラの母(声のみ)	<u>不明</u>	<u>水城蘭子</u>	<u>竹口安芸子</u>	<u>寺内よりえ</u>	<u>佐藤しのぶ</u>
ガソリンスタンド店主	<u>Tony Mirelez</u>	<u>及川ヒロオ</u>	<u>丸山詠二</u>		<u>水野龍司</u>
ナンシー	<u>ショウン・シェップス</u>	<u>小宮和枝</u>	<u>滝沢久美子</u>	<u>浅野まゆみ</u>	<u>魏涼子</u>
路地裏の警官	<u>エド・ドゥーガン</u>	<u>屋良有作</u>	<u>幹本雄之</u>	<u>乃村健次</u>	<u>廣田行生</u>
電話の男	<u>ジョン・E・プリストル</u>	<u>村松康雄</u>			<u>辻つとむ</u>
電話の妻(声のみ)	<u>不明</u>	<u>高橋ひろ子</u>	<u>滝沢ロコ</u>		<u>喜田あゆ美</u>
男性キャスター	<u>ジョー・ファラゴ</u>	<u>嶋俊介</u>	<u>中江真司</u>		<u>津田英三</u>
女性キャスター	<u>ヘティ・リン・ハーツ</u>	<u>鳳芳野</u>	<u>竹口安芸子</u>		<u>むたあきこ</u>
警察署受付	<u>ブルース・M・カーナー</u>	<u>村松康雄</u>	<u>島香裕</u>	<u>乃村健次</u>	<u>水野龍司</u>
男性客2	<u>レスリー・モリス</u>	<u>秋元羊介</u>	<u>小室正幸</u>		
男性客3	<u>ヒュー・ファリントン</u>	<u>阪脩</u>	<u>秋元羊介</u>		
女性客1	<u>ハリエット・メディン</u>	<u>竹口安芸子</u>	<u>滝沢ロコ</u>	<u>佐藤しのぶ</u>	
ナレーター		<u>伊藤惣一</u>	<u>中江真司</u>	<u>高宮俊介</u>	<u>立原淳平</u>
演出		<u>藤南勝之</u>		<u>高橋剛</u>	<u>小山悟</u>
翻訳	<u>岡枝慎二</u> (ソフト版字幕) <u>林完治</u> (BSプレミアム旧版字幕) <u>種市譲二</u> (BSプレミアム新版字幕)	<u>宇津木道子</u>		<u>松田海</u>	<u>原口真由美</u>
効果		<u>リレーション</u> <u>桜井俊哉</u> <u>遠藤堯雄</u>			<u>リレーション</u>
調整		<u>切金潤</u>		<u>金谷和美</u>	<u>重光秀樹</u>
担当		<u>向井士郎</u>		<u>夏海佑実</u>	<u>別府憲治</u>
プロデューサー		<u>猪谷敬二</u>			<u>久保一郎</u> <u>渡邊一仁</u>
制作協力				<u>ビーライン</u>	
製作		<u>東北新社</u>		<u>エンジェル</u> <u>ワークス</u>	<u>テレビ東京</u> <u>ケイエスエス</u>
初回放送		<u>1987年10月18日</u> 『 <u>日曜洋画劇場</u> 』			<u>2003年5月29日</u> 『 <u>木曜洋画劇場</u> 』

※新VHS/DVD/BD版吹替の初出は1998年2月25日カルチュア・パブリッシャーズより発売のDVDにて。その後20世紀フォックス ホーム エンターテイメント ジャパン及びソニー・ピクチャーズ エンタテインメントより発売の各種VHS/DVD/BD(後述)に収録されている。

※20世紀フォックス ホーム エンターテイメント ジャパンの「吹替の帝王」シリーズ第9弾として、上記の全4種類の吹替版を収録したBlu-ray Disc「ターミネーター 〈日本語吹替完全版〉 コレクターズ・ブルーレイボックス」が2015年6月24日に発売。特典としてテレビ版吹替台本2冊とインタビュー集が付属している。

地上波テレビ放送履歴

回数	放送日時	放送分数	放送局	番組枠名	視聴率	吹替版
1	1987年10月18日(日) 21:02-22:54	112	テレビ朝日	日曜洋画劇場	19.9%	テレビ朝日版
2	1989年 2月 4日(土) 21:02-22:54		<u>フジテレビ</u>	<u>ゴールデン洋画劇場</u>	19.4% ^[4]	
3	1990年11月25日(日) 21:02-22:54		テレビ朝日	日曜洋画劇場	19.4%	
4	1991年 9月 8日(日) 21:02-22:54				29.7%	
5	1993年 3月28日(日) 21:02-22:54					
6	1996年 9月28日(日) 20:59-22:54	115	フジテレビ	ゴールデン洋画劇場		
7	1997年12月28日(金) 21:02-22:54	112	テレビ朝日	日曜洋画劇場	12.8%	
8	2000年 7月14日(金) 21:03-22:54	111	<u>日本テレビ</u>	<u>金曜ロードショー</u>	16.2%	
9	2001年 4月21日(土) 21:30-23:24	114	フジテレビ	ゴールデン洋画劇場	14.8%	テレビ東京版
10	2003年 5月29日(木) 21:00-22:54		テレビ東京	木曜洋画劇場	10.9%	
11	2004年12月16日(木) 21:00-22:54				7.8%	
12	2009年 6月 3日(月) 21:00-22:54			<u>水曜シアター9</u>	7.7%	
13	2014年 4月 7日(月) 03:10-04:45	95	テレビ朝日			DVD/BD版
14	2014年11月17日(月) 13:35-15:35	120	テレビ東京	<u>午後のロードショー</u>		テレビ東京版

- 1991年9月放映時の視聴率は、日曜洋画劇場の歴代視聴率の第4位にランクインした。
- 1987年10月18日の地上波初放送に先立つ1〜3週間前に放送された「番組予告編」は声優の小林清志がナレーションを担当した。

作品解説

製作に纏わるエピソードとして、キャメロンが見た悪夢の話がある。前作『殺人魚フライングキラー』が失敗した際、彼は評論家やマスコミにもひどくこき下ろされたため、屈辱の余り熱を出して寝込んでしまったという。そのとき、「炎の中からロボットが現れて自分を殺しに来る」という悪夢を見た事が、本作を製作するきっかけとなったと語っている。

作中で「審判の日(Judgement day)」とされるのは1997年8月29日だが、この月日は、当時アメリカと冷戦を激化させていたソ連による初の原爆実験(RDS-1)に由来し^[5]、映画が公開された前年の1983年には第三次世界大戦が起きかねない監視システムのコンピュータが核ミサイル発射を誤報した事件も起きていた^[6]。キャメロンは本作は冷戦を意識していたことを述べている^[7]。

製作するに当たって、キャメロンは「現代の技術では殺人口ボットの実現は不可能であるし、かと言って未来の話ではセットに費用がかかる上に観客にも受け入れがたいと考え、その結果、未来の殺人口ボットが現代にやって来るタイムトラベルのアイデアが浮かんだ」と語っている。

人選

主役のT-800について、企画当初の予定では続編『ターミネーター2』のT-1000の様な「一見すると貧弱そうな男が異様な強さを発揮する」というキャラクターを構想していた。ランス・ヘンリクセンが候補に挙がっておりパイロット版も制作されていた。他にも、O・J・シンプソンをターミネーター役に配役する構想もあった。

一方、俳優としてのキャリアが浅かったシュワルツェネッガーは、カイル・リース役を望んでいた。しかしキャメロンが、カイル役候補として彼と会食したことを機に状況が一変する。彼はシュワルツェネッガーの似顔絵を描いている内に、T-800役に相応しいと考え直す。さらに、彼からT-800のバックグラウンドに関して良いアイデアを貰ったことから、この役はシュワルツェネッガーしかいないと確信するようになった。結果として本作は、彼を一躍ハリウッドスターへと押し上げた。次作『ターミネーター2』からは悪役から主役へと立場が変化し、人間側(ジョン・コナーを守る立場)として活躍するようになる。

この映画で一躍世界的なスターとなったシュワルツェネッガーは、本作以前は『コナン・ザ・グレート』のヒットもあり、全くの無名という訳ではなかったものの、元々オーストリア出身でドイツ訛りがあり当時は英語が得意ではなかったという事もあってそれほど人気の俳優ではなく、なかなか役に恵まれず苦労を重ねていた。しかしこの英語の不得手さが、逆に「人間のふりをしようとする機械」として、ターミネーターの非人間的な感じを出すには言葉が饒舌であるよりも片言で喋る方が良いと考えていたキャメロンの目に留まることとなった。

カイルを演じたマイケル・ベーンもオーディション当時は舞台劇の影響で南部なまりが強かったため、不自然だということで落とされかけたが、エージェントによって南部出身者ではないと説明され危機を脱した。

なお、主役を交代したヘンリクセンは本作でブコビッチ刑事を演じている。

裁判

設定の一部について、1963年のテレビドラマ『アウター・リミッツ』のハーラン・エリスンが脚本を担当した2つのエピソード(第33話『38世紀から来た兵士』、第37話『ガラスの手を持つ男』)から剽窃したものである、との訴えがエリスン側から起こされた。結局キャメロンは80万ドルを支払い、ビデオ化以降のエンドクレジットに「Acknowledgement to the works of HARLAN ELLISON(ハーラン・エリスンの作品に謝辞)」と追加することを条件に和解した。

エンディング

ガソリンスタンドにいた少年に「嵐が来るよ」と言われたサラが「ええ、わかってるわ」と返すシーンは「機械との戦争が待つ未来」を暗示させるものだが、これは製作陣があらかじめ続編を意識していたことの表れともされている。元々は、破壊されたT-800のマイコンチップを技術者が回収するシーンに加え、最後の戦いを繰り広げた場所がサイバーダイン社であったという、より強い伏線を張ったエンディングであったが、キャメロンの「映画は説明しすぎず、観客の想像に任せたほうがいい」との判断によりカットされた。

その他

- 1984年2月8日から撮影は開始されたが、その直後から、シュワルツェネッガーはキャメロンの完全主義を思い知らされることになった。「あの時のジェームズは凄かったよ。事前に、撮影するショットをととても細かく説明するんだ。その位置が1ミリずれただけで、物凄く凶暴になるんだよ!」と述べている。また、ターミネーターが車のフロントガラスを叩き割るシーンで、ターミネーターの体から煙が出ている様子を再現する際、本物の酸をかけて煙を発生させた。スタッフ側は「弱い酸だから大丈夫だ」と主張したが、シュワルツェネッガーは「もっと別の方法はなかったのか」とずっと疑問に思っていたという。
- 肉体を焼失したT-800が骨格のみで追跡を再開する以降の部分は、トラックに轢かれて足が破壊された設定にし、ストップモーション・アニメーションの予算を削減している。また、ストップモーションが必要な全身が映るカットはわずかであり、ほとんどのシーンはフルサイズの模型をスタッフが操作している。
- 警察署窓口を去る際にT-800が口にする「また戻ってくる (I'll be back.)」は、本作以降シュワルツェネッガーのトレードマークとなり、続編を含む以降の出演作で同じセリフを言うシチュエーションが多用されている。
- 他の削除シーンとして、最終決戦間近のサラがディズニーランドに行こうと約束したり、未来人であるカイルがホットドッグを知らないなど、つかの間の日常生活を強調した場面があったが、「クライマックスに向けての流れを阻害する」旨の理由でカットされた。
- T-800は銃砲店から奪ったAR-18やUZIをフルオートで発砲しているが、比較的銃器に寛容なアメリカ合衆国といえど、フルオート機能を持つ銃器の売買には警察およびBATFEの許可が必要である(劇中では許可申請証を店員が出す前に射殺した)。小説版には、T-800が改造マニュアルを見ながら、フルオート射撃可能な状態へ改造する場面が登場する。ちなみに、これは実際にアクション映画等の銃器担当スタッフがフルオート銃器を調達するために常用する手段(もちろん許可が必要)である。なお、T-800の使用する銃は大半が「自動式」に対し、カイルは手動装填式のショットガンや回転式拳銃という「原始的な構造」の銃を使っている。
- 銃砲店でT-800が銃を選ぶ際に「射程距離400のフェイズドブラスマライフル」を指定するが、この時代には存在しない未来の兵器であり、情報ミスである。これに対応した銃砲店の店主は「見た通りさ、ないだろ?(Hey, just what you see, pal!)」と軽い調子で受け答えしている。ソフト版字幕では「なんですそれ?」、テレビ朝日と旧VHS版吹替では「生憎そいつは今、無いんだ」、DVD版吹替では「それは今、置いてないね」、テレビ東京版吹替では「ここにある物にしてくれ」、公開時の劇場字幕と当時のノベライズ版では「まだ入荷していません」とそれぞれ訳されている。
- カイルはパトカーから奪ったショットガンを、ストックを切り落として全長を短くし、使いやすく改造してから右腕にひもでくくりつけ、落としたり奪われないようにしているが、『ターミネーター4』では少年時代のカイルがマークス・ライトから銃に関する「手品」としてひもでくくりつけるアイディアを教わるシーンがある。
- 映画の宣伝ポスター等でT-800が構えていたAMTハードボーラーは、銃の上にレーザーサイトが装備されている。作中ではT-800が銃砲店から強奪した銃の中の一挺で、一人目のサラ・コナーの殺害から、ディスコの銃撃戦まで使われている。この特徴的なレーザーサイトは、当時いち早く銃器用レーザーサイトを開発して販路を構築していたレーザープロダクツ社(後のシュアファイア社)の試作品で、宣伝も兼ねて提供されたものである。ただし、撮影に使われたものは開発段階のもので、作動に十分な容量のある内蔵式バッテリーの開発が済んでいなかったため、電源はコードを介して外部から取られている(腕の袖で隠れる部分にバッテリーが括り付けられている)。
- サラがT-800をプレス機で押し潰すときのセリフ「You are terminated. (「抹殺完了」「お前を抹殺する」)」は、『ターミネーター3』でT-850がT-Xを破壊するときにも使用された。『ターミネーター2』では、ジョンの「Is he dead?(死んだの?)」に対し「Terminated. (完全に)」という台詞が発せられている。
- カイルの回想にてシュワルツェネッガー以外の筋骨隆々のターミネーター(演者はボディービルダーのフランコ・コロンプ)が登場している。
- カイルがサラに言った「機械のことは信用するな。やつらは悲しみも感情もないのだ」と言う台詞は『ターミネーター2』や『ターミネーター・サラコナークロニクルズ』でサラが頑なに信じている言葉でもある。『ターミネーター2』特別編でT-800のチップを取り出し、叩き壊そうとしてジョンに制止さ

- れるシーンがある他、サラはジョンを助けに来たTOK715型ターミネーター(キャメロン)をも信用してはいない^[8]。
- サラのアルバイトは、キャメロンの最初の妻シャロンがやっていた仕事と同じウェイトレスにした(サラは「ボブのビッグバンズ」で働いているが、シャロンは「ボブのビッグボーイ」というレストランで働いていた)。
 - 主役を外されたヘンリクセンは「ジムにごまかされたと感じたことは、一瞬たりとも無かったね。僕はもうこの業界が長くて、時にはそうなることもあるって分かっているし。確かに自分がターミネーターを演じることができなかったのは残念だけど、それと同じくらいこの映画を作って欲しかったんだよ」と語った。
 - 日本での公開日(1985年5月25日)から30年を記念して、2015年に日本記念日協会によって、5月25日を『ターミネーターの日』と認定された^[9]。
 - 2001年発売の2枚組DVD(GXBA-15917)発売の際に、次作でアカデミー賞を獲得したスカイウォーカー・サウンドにより音響効果が全面的にリニューアルされた。2001年盤ではオリジナル・モノラル音声も収録されていたが、2003年のDTS盤2枚組DVD(GXBU-15917)発売以降のすべての映像ソフトはオリジナルのモノラル音声のカットされており、オリジナル版を聴くことが出来なくなっている。
 - 日本の安川電機製の産業用ロボットである「MOTOMAN」がクライマックスのシーンに出演している^[10]。
 - 岐阜県下呂市にある「留之助商店(オーナーはSFX著書で有名な中子真治)」にて、実際に劇中で使用されたT-800の実物大モデルが展示されている。

ソフト化

VHS

- ターミネーター※ アスキー映画株式会社より発売。(ポニーキャニオン販売)
- ターミネーター※ 2001/11/22 20世紀フォックス・ホーム・エンターテイメント・ジャパンより発売。

DVD

- ターミネーター※ 1998/02/25 カルチュア・パブリッシャーズ株式会社より発売。
- ターミネーター※(特別編2枚組)2001/11/22 20世紀フォックス・ホーム・エンターテイメント・ジャパンより発売。
- ターミネーター※(アルティメット・エディション)2003/07/04 20世紀フォックス・ホーム・エンターテイメント・ジャパンより発売。
- ターミネーター※(アルティメット・コレクション)2006/06/21 ソニー・ピクチャーズ エンターテインメントより発売。
- ターミネーター※ DVDクアドリロジーBOX(ターミネーター1/2/3/4セット4枚組)2009/11/20発売 ソニー・ピクチャーズ エンターテインメントより発売。
- ターミネーター※ 通常版 2010/10/08発売 20世紀フォックス・ホーム・エンターテイメント・ジャパンより発売。
- ターミネーター※(完全版2枚組)(初回生産限定)2012/03/16 20世紀フォックス・ホーム・エンターテイメント・ジャパンより発売。

Blu-ray disc

- ターミネーター※ 通常版(初回仕様有り)20世紀フォックス・ホーム・エンターテイメント・ジャパンより2012/12/19に発売。
- ターミネーター※【Amazon.co.jp限定】ターミネーター スチールブック仕様ブルーレイ(初回生産限定)20世紀フォックス・ホーム・エンターテイメント・ジャパンより2012/12/19に発売。
- ターミネーター ※ スペシャル・ブルーレイBOX(「ターミネーター」/「プレデター」/「コマンドー」の3作品を収録している。3枚組)(初回生産限定)20世紀フォックス・ホーム・エンターテイメント・ジャパンより2012/12/19に発売。
- ターミネーター〈日本語吹替完全版〉コレクターズ・ブルーレイボックス 20世紀フォックス・ホーム・エンターテイメント・ジャパンより2015/6/24に発売。

続編

- ターミネーター2(1991年8月24日公開)
- ターミネーター3(2003年7月12日公開)
- ターミネーター4(2009年6月13日公開)
- ターミネーター サラ・コナー・クロニクルズ(2008年放送)テレビシリーズ
- ターミネーター:新起動/ジェニシス(2015年7月10日公開)
- ターミネーター:ニュー・フェイト(2019年11月1日公開予定)

ゲーム作品

ザ・ターミネーター (Nintendo Entertainment System)

日本国外のみで発売されたゲーム。左・右スクロール型のアクションゲーム。カーチェイスステージなどもある。NES仕様だけに難易度が高く、コンティニューやセーブ等もない。

ザ・ターミネーター (メガCD)

日本国外で発売されたメガCD版。ヴァージンインタラクティブ制作。
未来編、敵基地内、現代編とターミネーターの舞台となったシーンを舞台とする2Dアクション。メガCDを活かした映画ムービーの導入やトミー・タラリコ作曲のBGMが特徴。

モータルコンバット11

10月8日にモータルコンバット11にてT-800がダウンロードキャラとして登場予定。ターミネータージェニシスの姿で登場する。

関連書

- 『ターミネーター』(講談社X文庫)R・フレイクス、W・H・ウィッツシャー 訳 吉岡平 1984年
- 『ターミネーターの秘密』HOLLYWOOD見聞会 データハウス 1993年 ISBN 4887181833
- 『『ターミネーター』解剖』ショーン・フレンチ 矢口誠訳 扶桑社 2003年 ISBN 9784594041007

またダーク・ホース社出版の『エイリアンVSプレデターVSターミネーター』のコミックがある。

脚注

- ↑ **a**b**c**“The Terminator (1984) (<http://www.boxofficemojo.com/movies/?id=terminator.htm>)”. *Box Office Mojo*. 2010年1月4日閲覧。
- ↑ 「[キネマ旬報](#)」2016年3月下旬号 109頁
- ↑ テレビ東京版の吹き替えでは警部補になっている。
- ↑ 今回の注目作:「[プレデター](#)」(<http://www.tv-asahi.co.jp/nichiyou/column/page/19/index.html>)
- ↑ “”Terminator 2: Judgement Day’ Turns 25: 25 Things You Never Knew About The Film” (<http://www.thehollywoodnews.com/2016/07/05/terminator-2-judgement-day-turns-25-things-never-knew-film/>). The Hollywood news. (2016年7月5日) 2019年6月27日閲覧。
- ↑ “Terminator Franchise: An Analysis (<https://medium.com/@mariogomes/terminator-d0bee5ac36bf>)”. Medium (2019年8月15日). 2019年8月21日閲覧。
- ↑ “Franchise Fred Interview: David Ellison and Dana Goldberg on Terminator: Genisys (<http://www.nerdreport.com/2015/06/29/franchise-fred-interview-david-ellison-and-dana-goldberg-on-terminator-genisys/>)”. Nerd Report (2015年6月29日). 2019年8月21日閲覧。
- ↑ 『ターミネーター2』のT-800に関しては、ジョンが人間に関する事を教えたり、一緒に遊んだりする様子を見て次第に信用していき、別れの際には握手を交わしており、このT-800が命の尊厳や、悲しみの感情を理解した事に関して、彼等が理解出来たのなら、きっと私達にだって理解できるはずと言う語りをラストのシーンにて発言している。
- ↑ “5月25日が「ターミネーターの日」に認定!シユワちゃんもご満悦 (<http://www.cinematoday.jp/page/N0073031>)”. シネマトウデイ (2015年5月8日). 2015年5月8日閲覧。
- ↑ “YASKAWA NEWS No.267 (https://www.yaskawa.co.jp/wp-content/uploads/2004/06/p06_071.pdf)📄 (PDF)”. 安川電機. 2017年11月3日閲覧。

関連項目

- また戻ってくる

外部リンク

- ターミネーター (<https://www.allcinema.net/cinema/13522>) - allcinema
- ターミネーター (http://www.kinenote.com/main/public/cinema/detail.aspx?cinema_id=5389) - KINENOTE
- ターミネーター (<https://movie.walkerplus.com/mv5379/>) - Movie Walker
- ターミネーター (<https://eiga.com/movie/46382/>) - 映画.com
- The Terminator* (<https://www.allmovie.com/movie/v49101>) - オールムービー (英語)
- The Terminator* (<https://www.imdb.com/title/tt0088247/>) - インターネット・ムービー・データベース (英語)

「[https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=ターミネーター_\(映画\)&oldid=75167107](https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=ターミネーター_(映画)&oldid=75167107)」から取得

最終更新 2019年11月28日 (木) 13:39 (日時は個人設定で未設定ならばUTC)。

テキストはクリエイティブ・コモンズ 表示-継承ライセンスの下で利用可能です。追加の条件が適用される場合があります。詳細は利用規約を参照してください。